

審査の結果の要旨

氏名 古賀 誉章

本論文は、「定型自由記述を用いた利用者による生活環境の評価手法に関する研究」という題目で、実際の利用者が生活環境の評価を行うことの必要性・重要性が増しているとの背景から、利用者の立場に立って考えることによってより本音に近い評価を得ると同時に利用者自身にも利益になるような定型自由記述を用いた評価手法について提案・考察を行ったものである。

まず、第1章で、研究の位置づけを行ったあと、第2章では、定型自由記述式調査について述べている。まず、本研究が課題とする計画・運営現場での調査は「実態調査型」の調査であり、できる限り本音に近い評価を得ようとする場合には「自由記述式」が最も適した形式であるということ。さらに、既存の自由記述式調査をの3つの方法的な違いで整理し、自由記述式調査には「調査に多少手間をかけてでも、より多くの・より本音に近い意見や評価を収集する」方向と、「分析の手間を省くために、データの質を揃えたり向上させる」方向の2つの流れがあることを導いている。そして、定性的な評価に有効なアプローチと論理的・定量的に考察し知見を蓄積していく研究的なアプローチとの両立が可能で、評価者が何らかの作業を行うことで意識を活性化させたり作業結果を言質としたりして評価を得やすくなる「作業付随型」と「定型自由記述式」を組み合わせた調査手法を検討することを本研究の方針としている。

次に、第3章では、既存の評価構造モデルの考え方を踏まえて、自由記述式データの内容を定量的分析に耐えられるようデータ化するために、評価文を構文に即して「要素」「特徴」「印象」「判断」の4成分に分割した「評価センテンス」として構造的に表現する「評価センテンスモデル」について説明している。さらに、語句の分類、キーワードと分類カテゴリーの導出、評価センテンスのデータベース構築、各語句へのアフターコーディング、データベースから検索・抽出、種々の分析、という手順で「評価センテンス」を定量的に分析する方法を開発している。

第4章では、「評価センテンスモデル」を利用した定型自由記述式調査法として「キャプション評価法」を提案している。「キャプション評価法」は、調査の参加者自身が歩き回って調査を行う手法で、調査参加者が、カメラ・図面（地図）を持って自由

に歩き回る，「いいな／いやだな／気になる」と思う空間・場面・部分などがあつたら撮影，撮影場所を図面上に記録，撮影した写真に対してキャプションを付ける，写真とキャプションを1つの書式にまとめ回収，という基本的な手順，また，様々な人の制約のない自由な意見・評価を抽出するために「現場で実物・実空間を評価する」「評価する対象を限定しない」「評価する観点を限定しない」原則を策定している。キャプションの収集方法は事例ごとに改良を重ね，実施方法別の特徴を整理している。適用範囲としては，都市景観から建築物の内部空間まで生活環境全般を評価でき，子どもからお年寄りまで実行可能な手法であることを確認している。調査報告のワークショップでは他人の意見を知ることによって意見が変化する学習効果もみられ，高齢者の調査ではリハビリ効果への可能性も示唆されたとしている。これらから，データを得るだけでない調査の「啓発効果」という別の効用と，「参加型調査」という概念を明らかにしている。

第5章では，「評価センテンスモデル」を利用したもうひとつの定型自由記述式調査法として「碁石法」を開発している。調査対象の様々な場所の写真を使用頻度によって4つに分類，無関係以外の場所に対し2種類のチップで点数づけ，置かれたチップおよび利用頻度についての理由を口頭で質問，という手順を策定し，施設入所高齢者など警戒心を強い人から本音に近い評価を聞き出すこと，身体不自由・痴呆症などで調査が難しい人からも意見や評価を聞くことを試みている。そのため，面接によって行う「聴取型」の調査とし，調査側が発話の中から「評価センテンス」を抽出していくこととし，得点を言質にして評価を聞き出すことを狙い，「作業付随型」の考え方により碁石・チップで得点をつけさせる方法を採用している。「碁石法」の実施における知見を整理し，予想以上に短時間での調査の完了，介護度の高い人や中程度の痴呆の人も含め全員からの評価の抽出，また，キャプション評価法に比べ不満点を多く収集できたこと，本音が引き出されていることなどを確認している。

以上に示したように，本論文では，より本音に近い評価を得るために定型自由記述式調査に着目し，「評価センテンスモデルとその分析法」「キャプション評価法」「碁石法」と「妥当性を考慮した分類手法」の4つの新しい手法を開発・提案し，その有効性を示し，また調査の「啓発効果」の重要性を明らかにしている。これは，建築学，特に建築環境心理学分野にとって有用な研究であり，工学に対する寄与は大きいと判断できる。

よって，本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。